



復興・再生へむけて

建築家達の試みを伝える 「3.11—東日本大震災の直後、 建築家はどう対応したか」 講演会

東日本大震災発生直後に実施または計画された建築プロジェクトを紹介する展覧会「3.11—東日本大震災の直後、建築家はどう対応したか」は、2012年3月から世界各地を巡回し、1年間で世界7カ国13都市で開催されました。各地での展覧会にあわせ、建築の専門家達による講演会を行いました。

東日本大震災と建築を巡る展覧会

建築展「3.11—東日本大震災の直後、建築家はどう対応したか」は、建築評論家の五十嵐太郎氏を監修者に迎えて国際交流基金が2012年3月に企画した、東日本大震災から1年の間に被災地で実施または計画された建築プロジェクトを紹介する展覧会です。50以上のプロジェクトを、「緊急対応」「仮設住宅」「復興計画」の3つの段階にわけて、図面や写真付きのパネル、また実際に避難所で使用されたダンボールの家具やシェルター、関連映像、模型などにより構成されています。本展覧会は、2012年3月より3年間にわたり、世界各地の巡回を計画しています。2012年3月からの1年間では、フランス(パリ)、中国(北京・香港・重慶)、韓国(釜山・済州・ソウル・麗水)、ロシア(モスクワ)、アルメニア(エレヴァン)、イタリア(ローマ)、ドイツ(ケルン)、ハンガリー(ブダペスト)を巡回しました。

講演会	釜山[韓国]	ソウル[韓国]	モスクワ[ロシア]	エレヴァン[アルメニア]	香港[中国]	北京[中国]	ローマ[イタリア]	ケルン[ドイツ]
	2012年5月17日	2012年7月5日	2012年6月22日	2012年7月17日	2012年10月19日	2012年11月29日	2012年10月23日	2012年12月12日
	慶星大学校	ソウル歴史博物館	国立建築博物館ルーナ	アレクサンダー・タマニャン建築研究所博物館	香港中文大学	清華大学建築学院	ローマ日本文化会館	ケルン日本文化会館
	来場者数: 150名	来場者数: 60名	来場者数: 30名	来場者数: 80名	来場者数: 150名	来場者数: 207名	来場者数: 57名	来場者数: 78名

展覧会の会期にあわせ、各地で実施された講演会

各国で開催された建築展の会期にあわせ、被災地での建築家の取り組みや、復興の現状をより良く理解してもらうため、本展覧会の監修者や建築家による講演会を実施しました。韓国・釜山では「記憶と建築」、アルメニアでは「東日本大震災が与えた衝撃—日本とアルメニアの共通点と相違点」、中国・北京では「系譜学的建築デザイン」等、各地の事情や聴衆の関心に合わせて、さまざまなテーマを設定しました。各会場には行政関係者や建築専攻の学生等、多くの人が来場しました。香港では四川大地震後の小学校建設に携わった中国人建築家の参加を得て、日本側の建築専門家達と「日本と中国の震災復興」というテーマで議論が行われ、復興のための知恵を国際的に共有し、蓄積していくことの重要性が再認識されました。各講演会では展覧会で紹介された震災「直後」のプロジェクトに関連し、今後の展望についても多くの議論が生まれました。日本と同じく地震の頻発する地域も、地震以外の災害等を経験したところも、災害は自身にも起こり得ることとして東日本大震災の経験を真剣に受け止め、立ち見の出る会場も数多くありました。会場では復興に関する具体的な質問も活発になされるなど、各地で高い関心をもって受け止められました。

講師と講演会のテーマ

釜山[韓国]:「記憶と建築」
宮本佳明/大阪市立大学大学院教授・宮本佳明建築設計事務所代表

ソウル[韓国]:「3.11の災害後、建築家が考え、行動したこと」
五十嵐太郎/東北大学大学院教授

モスクワ[ロシア]:「アーキエイド—建築家による復興支援ネットワーク」
福屋粧子/東北工業大学専任講師・福屋粧子建築設計事務所代表

エレヴァン[アルメニア]:「東日本大震災が与えた衝撃—日本とアルメニアの共通点と相違点」
源栄正人/東北大学大学院教授
芳賀沼整/はりゅうウッドスタジオ常務取締役

香港[中国]:「日本と中国の震災復興」
五十嵐太郎
迫慶一郎/SAKO建築設計工社主宰
朱競翔/香港中文大学副教授

北京[中国]:「系譜学的建築デザイン」
塚本由晴/東京工業大学准教授・アトリエ・ワン

ローマ[イタリア]:「復旧の現状と明日の建築への展望」
五十嵐太郎

ケルン[ドイツ]:「復興の現状、今後の建築の展望」
五十嵐太郎



【上】ローマの会場には若い建築家や建築専攻の学生達が多数来場した
【前頁】ローマでの五十嵐太郎氏による講演会 2点とも©Mario Boccia

各会場で

ソウルでは……

ソウル歴史博物館のカン・ホンビン館長は都市計画の専門家、元ソウル市副市長。この展覧会について「素晴らしい企画。多くのひとと、特に大都市に共通する課題として行政にかかわる人に見てもらいたい」と述べた。



ソウル歴史博物館での展示風景

モスクワでは……

国立建築博物館館長はじめ建築の専門家が多数来場。またロシア有数のニュース番組「ヴェスチ」でも紹介された。質疑応答では「アーキエイドの活動は、ロシアにおいても適用可能か」等、現実的な展開を視野に入れた真剣なやりとりが行われた。



モスクワ国立建築博物館での展示風景

エレヴァンでは……

アルメニアは地震が多く、また原発を有することから、催しは高い関心を呼び、都市建設大臣、非常事態大臣、関連省庁関係者や、建築・建設関係者、地震対策関係者なども多数出席。3.11以降の活動、防災の考え方、災害教育の必要性等が豊富な写真とともに紹介された。

世界の各会場での来場者からのコメント

【香港】

多くの知識を与えてくれた。日本の再建に役立ちたいが、私達になにができるのか知りたい。

国籍や住むところが違うにもかかわらず、社会や人びとを助けるために、震災後の復興・再建に全力をつくしてきた建築家達の傑作を見て素晴らしいと思った。彼らの努力によって、建築家の役目は何なのか改めて考えさせてもらうことができた。

【北京】

日本の建築が周囲の環境によく合わせて設計されていることは、見習う価値がある。

【ローマ】

建築家のエゴや政治のパフォーマンスでなく、純粹に人びとの要望に応えようとする建築家の姿勢に感動した。将来の復興プランについてもっと知りたい。

【ケルン】

危機の克服と復興計画に対する新しい視点を獲得することができた。

第13回ヴェネチア・ビエンナーレ 国際建築展関連シンポジウム



日時	2012年8月29日	来場者数: 80名
会場	ヴェネチア大学 カ・フォスカリ	
パネリスト	伊東豊雄(建築家)、妹島和世(建築家)、菅原みき子(NPO法人陸前高田「みんなの家」)	
進行	フランチェスコ・ダルコ(ヴェネチア建築大学教授)	

国際交流基金は「ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展」の日本館展示を毎回主催しています。2012年は「ここに、建築は、可能か」と題して、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた陸前高田に、被災者のための憩いの場「みんなの家」をつくるプロセスが紹介されました。この展示は第13回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展国別参加部門の最優秀賞である金獅子賞を受賞しました。

会期中、関連シンポジウムを実施し、陸前高田「みんなの家」の他、被災地において進められているプロジェクトについて、日本の建築家と利用者双方からの報告がなされました。